

リベルテール

9月号

（日曜） 日七十二月九年二十正太

（二）

同志達に護られた

淋しい三つの寢棺

大杉榮氏等の屍體を引取る

けふ落合村で火葬

市

きのふ

山と積

柩を迎へる家

手間取るも心配

無心な四人の兒女達

山と積

殺
sha



Libertaire VoL, VI, No 9

無政府主義誌

昭和45年 9月4日第3種郵便物認可
昭和50年 9月15日発行第68号

リベルテール 定価200円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1975年9月15日発行 VoL, VI, No. 9
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

今月のことば

宗教について
宗教はアヘンである——マルクス
ボルノもアヘンである
個人的悩みを解決する故に
理想社会において アヘンは必要である
——日共宮本委員長

天皇訪米準備成る
費用一億七千万円也
国民一人一円五〇銭強提出か？
——銀行の政治資金提出に反対する会

クロム過広がる
風は尾花が寝たといい
尾花は風が寝たと言う
——日本化成・日本電工
太田薫委員長
取締各関係官庁——

目次

巻頭言

リベルテール五月号を読んで 下山恒美 1

レポート・演劇の記 甲斐 一 2

「東印」再建記 山口健助 7

野火 14

「リベルテール読者の会」を開く 14

小説「甘柑大尉」を読む——はしもとよしはる 14

特別資料

七〇才のサルトル（アナキスト宣言） 16

前号で大門君の「欺瞞と暴力の大企業の犯罪化」を紹介した中で、僕は「大衆はなかなか立たないものだ。だが立たないのではない。立たないのだ。あの安保の時のように」と書いた。七〇年安保を期して総評はじめ、計画し、アジッタが民衆は立たなかった。笛吹けども踊らずであった。しかし歴史を知る者は、この民衆が立上る時があるのを知っている。ただ小細工は通じないというだけだ。若い諸君がよく、ロシア革命の時のこのした一つの波に便乗した狡猾なレーニンの言葉などに欺かれて、社会的不安をかき立てて革命に導こうとするものがあるが、これは民衆不在のエリート主義か、権力夢想家の近視眼的行動でしかない。

社会が二極化して、貧困化した大衆の叛逆によって革命が起ると考えたマルクス、半植民地的社会を背景としたレーニン、いずれも前時代的エリートでしかない。資本主義が巨大化し、国家機構も整備された今とは、時代が違うのだ。われわれは眼まぐるしく変転する社会状況を前にして、考えまた考えたブルードンのような精神を持つべきだ。彼は矛盾の人と呼ばれた。しかし、それは一貫するものを持ち続けている矛盾であった。いまや「革命は如何にあるべきか」が、新しい課題としてわれわれに提出されている。前時代的なマルクスやレーニンではもう解答にはならないのだ。ケインズにしたがってインフレを逆用した資本主義制は、民衆にも少しばかり甘い汁をのませて、その生活も向上させ、現実を謳歌させて革命的意欲（実は不満）をゴマカした。革命的意欲は社会の不正に対してのもので単なる不満である筈はない。われわれは民衆と共に立上るためには、民衆の底に流れる正義の要求に共感するものでなければならない。

民衆は今も、物価、失業、公害、教育、軍備、不平等な賃金、社会的階層組織、官僚主義、それを支える資本主義とそれに密着した国家権力に苦しんでいる。これが現実である。こうした現実をふまえて「革命はいかにあるべきか」を新しい課題として考え直そう。

リベルテール5月号『生活と葛藤』 を読んで

山中氏に送る

下山 恒 美

本誌五月号が私のもとに届いたのは七月も末のことで少々時期遅れの感はお許しいただきたい。

最初に自分の立場を明確にしておくことにする。私は学生やブルジョアジーやインテリゲンチヤのいづれでもない。働く事を唯一の飯の種としている一労働者である。

山中氏は言われる。『現実はその中（資本主義社会）に寄生しなければ誰もが生存できない事は事実である』『食っていく生活と自分の求める理想との間に葛藤を生じるのがアナキストの日常生活だろう』と。私も同様と思う。

しかし氏はさらにこう言われる。『どこかに所属の部品であることを拒否することであり、イデオロギーでも思想でも依存することをやめることである』と。このあたりになると私は手をたいて喜んではいられなくなってしまう。ここにきて氏の考え方に相異をみた。それ

は現実の生活をぬきにしてしまった考察の甘さではないだろうか。

我々は働いているからこそ存在しているのだと思う。もし現体制において純粹にアナキズムを貫こうとするならば、それは個人の滅亡すなわち「死」以外にはないと私は考える。我々は真に行動でき得るためには、我々が存在する全ての場所がアナキズムに浸っていないなければならない。たといアナキストグループの内部においてアナキズムが実現されていたとしても、外部との接触においては既存の体制に従わなければならない。アナキズムの社会でないところではアナキズムは通用しえない。つまりアナキズムは存在しない。無である。

誰しもが通らなければならない極限状態である。ここに至って生きるか死ぬかの二者択一にせまられた時、生きたいと欲する。理屈ぬきで生きたいと欲する。だから我々は生きている。そもそも我々の出発はアナキズムに背を向けたところから始まっているのである。

しかし私は言いたい。これはアナキストだけの出発ではない。これは自由を求める人々の出発なのである。アナキストをも包含する「自由」を求める人々の出発なのである。そして私の生のはじめもここにある。自由もまたアナキズムに等しく現実には存在しえない、「無」な

のである。そしてアナキズム思想と生きることの矛盾、そこから生じる葛藤は最早越えていなければならない。

組合をやめるとか大学をやめるとか職場をやめるとかがアナキズムを貫く反権力行動だとは思わない。大切なのはアナキズムを忘れぬことである。それはアナキストと名乗ることとは異なる。思想は信じられるが人間を信じるのはむづかしい。従ってアナキズムは信じられるがアナキストと名乗る人間を信じるのはむづかしい。ロシア革命の場合、思想に裏切られたのではなく一個の人間の迷惑に裏切られた。昔も今もアナキズム運動に基づく幾つかの団体の内部分裂は個々の思考の差異が起因している。だから団体は消滅しても個々人のそれぞれの内部では依然としてアナキズムは活き続けている。

なぜ労働をやめてはならないのか。資本主義社会で生きぬくためには経済的基盤の確立がなされていないからである。もし自分で働く事をしなかったなら他人の労働（親とか知人とか友人とかの）に頼らねばならないであろう。仮りにそういうふうに住生活している人間がいたとしたら、それは他人の利益を食いものにする怠け者にすぎない。我々はいつだって働かなければならない。今はただ働くための条件が我々の理想と違うだけの事である。

私はまだ十分なアナキズム運動の展開をしらない。具體的なアナキズム社会の構想もまだとまらない。個々の中で黙々としているのはその為でもある。もし、社会からも職場からも追放されぬアナキズム運動、直接行動があるならばそれを望みたい。残念ながら今はただ飯の種を奪われぬ程度に抵抗するのみである。

しかし、我々は何かしなければならない。

その前に我々は先ず「アナキズム」という言葉さえ人々には識られていないことを知らなければならない。たいていの人々は社会に不満を持ちながらそれをどう消化してよいのかわからずにいるのである。

私とて同じ事であった。なぜならアナキズムを識らなかったつい最近まではどこに視点をあたりたいのか定まらずにいたのである。だから国民の権利として選挙権があることは当然であり、それを遂行せねばならぬ義務を自分の気づかぬところで守ろうとし、守らなければ罪悪観念に捕われるところがあった。選挙券が届く度に自分が一票を投じたところで「何にもならない」と思いながら、一方では投票に「行こうか行くまいか迷う」生活があった。そういった事は「教育の恩恵」に他ならない。なぜなら政府のない社会を思いつく事さえ出来ぬように国家の思いのままに仕込まれ続けてきたのだから。我々

の身辺をザッと見まわしただけでもこのような例はきりがない。

我々是我々の最終目的である社会変革の爲には人々を目覚めさせなければならぬ使命を必然的に負っている。それは小人数では何も出来ない事を意味する。たとい民衆が蜂起したところで彼らは何を目指しているのかわからなかったなら、ロシア革命の二の舞を踏む事は間違いないだろう。

ここにきて我々が何をしなければならぬかを考えると、先ず今あるアナキストグループの在り方を明確にする事。それに対して各個人やグループがどうかかわるかはっきりさせる事。一方その中においてアナキズム運動の展開を具体化し、その上でアナキスト陣営にとどまることのない、広く一般へのプロバガンダを押しすすめていけなければならない事——等である。

しかし、これは我々にとっては尋常であっても、国家にとつては我々は叛逆者であるから前途は多難と言えよう。それでも尚我々はアナキズムに徹して行動しなければ、生きなければならないのである。

もらったりした文書

橘宗一少年の墓碑保存会の呼びかけ☆サル・トシ一八三☆フリー・ニュース十三号☆月刊共同体一三〇号☆けんさん一三一号☆アイヌモシリ独立戦士獄中通信一号、裁判通信一号、救援通信二号と五号、「実方藤男」を粉砕せよ／二号☆リベロ三二号☆関西地方準備会ニュース七号☆政治経済情報三〇七号☆遊撃五五号、他ビラ☆頭脳戦線一六号☆黒の手帖十九号☆三文評論アンケイト他ビラ二葉☆黒ヘル救対ビラ・公判通信五四／五六号☆暗黒名單☆何か一号☆ひとりの歌二号、個人通信六月二七日号☆日本無政府主義者連盟準備会ポスター☆

一応受け取ったものは一つの所に保管していますが、何人もの人が手にするため少しバラバラになります。礼状も思うように出せません。それで一応ここにもらった文書を記しているわけです。いつもすみません。これからもどうかよろしく願います。

(山本)

レポート

演劇の記

甲斐

始めての分野に接する時、私は慎重すぎるほどソロリソロリと足をさしたるか、あたりもかまわずすぐやっちゃうか、のどちらかをとる。(これは私だけでなく多分他の人も同様だろうが) 劇には後者のやり方で関わり始めた。作品についての理屈や相互の演劇論上での納得よりも何よりもやっちゃう事が重要だと思われた。リベラルサーロンでの顔なじみから劇の誘いを受けた時私はこの未知の領域に足を踏み入りたいという強い衝動がわいた。翌週には作品を書いたＴさんと話した。内容はすっかり忘れてしまったけれど相手の熱心な話しぶりは覚えていて。その時みせてくれたシナリオには、娯楽を求めて自分と切り離れたところで演じられる劇を観にやってくる客の期待を裏切り、さらにはその肩にいくばくかの不安や負担をのっけて帰らせようという基調が流れていた。

劇団として人間を集めはじめたのは6月頃からだ。た。名の売れていない劇団には人が容易に集められない。特に女性の役者がみつからなかった。やっと一人を確保したのと同時にシナリオの基調が薄れはじめてきた。さら

には照明や音響を専門家に担せる事に決めてからはシナリオは後退するばかりであった。

一人の無政府主義の黒い心は他の人々と混じわるにつれてうすれていく。ミルクが一滴でも入るとコーヒは茶色になってしまうように。私はベクトル(力と方向性)というものを考える。この存在を相手に感じさせる事は役者の技術(発声・表情等)の上手下手や作品の完成度などよりも重要だと思っている。劇団員個々のそして総体としてのベクトルを放射できる演劇を、と思っていた。しかし、集まったメンバー同士のベクトルは飛びかうまですでにいかず、とにかく公演日に間に合わせるといふ本来全く逆な発想から柵を設けて七月本格的なケイコとなった。

ある程度の期間、集中しなければならぬ事になると真先に声をあげるのは、何もかも考慮しなければならぬといういわゆる責任者達である。七月になってうけおるのはセリフだけという私達役者の気楽さとはうらはらに作者・演出家の周辺は多忙を極め相当消耗気味であったのだろう投げやりな態度が見られだし、それに応じてこちららも妙なケンタイ感(役者の一人が離脱した事件もあった)を感じてきた。最初に会った時の目の輝きは七月半ばの作者からは消えていた。互いの沈黙は了承であ

るとしてのケイコが続いた。その間、外との接触が増すにつれて技術面でのシナリオの解説しかできない状況が生じもはや黒色など口にされなかった。互いに必要な事以外は黙し合つて時を通りぬけていった。

八月の公演日が近づくにつれて再び活気がでてきた。しかしこれはベクトルの発する熱ではなく、あせりの発汗作用であつたろう。深まらない言葉同士が混りあい流れた。公演日が一週間ほどに迫ってくると、作者が睡眠薬でフラフラになってケイコ場に来る、という事態となつた。その時、彼は異様にはりつめた瞬間をみせたが、そのすぐみは翌日は再び消えてしまった。彼は毎日、薬を飲んで来るべきだったかもしれない。

私は相手の隅々まで知つてから劇をやるべきだとは思わないが、少なくともベクトルの合致の有無を確認してから事を始める方が良いとは考へている。さもないと何の志向もない寄せあつめの人形芝居になってしまう。だからケイコの期間中に生じた諸々の問題を沈黙する事でかわした私自身を残念に思う。

八月六・七・八日と公演した。これについては、私は述べる事はない。やつちまつた事だ。こんな言い方が良いのかどうか疑問だが、印象は愉快であつた。と言へる。

ざっとした走り書きになった、よく解らないかもしれないが実のところ一度くらいやつただけでは劇について色々述べるわけにはいかないのだ。多謝。

一二月の冬の日、再び芝居をやる、という仲間はいる。公演のあと散々五々、湯でたような新宿の街へ別れていった操り人間劇場の友人達よ。君も再びやるか？

無政府主義者連帯会議について

九月十三、十四、十五日、東京において日本無政府主義者連盟準備会主催の無政府主義者連帯会議が行なわれた。

準備会は連盟結成を視野に見ているかの如く、一部参加者の意識と遊離しているかに見られる場面もあつたが連帯という実を上げるには効果あるものとなつたと思う。会議は準備会側司会のもと、紹介、挨拶、基調報告、総括等、比較的順序よく行なわれ、種々の討論が行なわれた。(討論内容は近々それぞれのところから報告がでるであろう)

連帯のための集会はどのような劣悪な状況下においても必要であろう。それは相互理解と新たな自己啓発への手助けにもなるものである。この会議を新たな連帯への更なる一歩にしよう。(山本)